

随泉寺寺報

平成 24 年 (2012 年) 3 月号 第 499 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

春季彼岸会法座

講師 元浄寺住職 近藤 一也師

講題 『つながりを大切に』

■彼岸会法要

「声のお荘厳」

門信徒の皆さまから法事をするにあたって、お仏壇の前には何を御供えしたらいいのでしょうか、というご質問をよくいただきます。そんな時は、お花やお菓子・物・ご飯をお勧めしています。お花はお仏壇のお荘厳で、お菓子・物・ご飯はお供物です。ご飯はお仏飯といひます。お荘厳とは仏さまのお住まいである極楽浄土の世界をお飾りすることです。その世界は阿弥陀如来さまの功德(恵み)に満ちていまして、常に阿弥陀如来さまの説法が響き渡り、光輝かしい世界であり、多くのお花が咲き誇り、そのお花からはいい香りがただよっています。その仏さまがまた阿弥陀如来さまの功德を声で荘厳しているのだそうです。その声が南無阿弥陀仏です。

今お参りしているあなたの口から、こぼれる「ナモアミダブツ」が一番のお荘厳です。

合掌

3月の法座予定

- 3月 2日 …………… 庫裏修復財務部会・本部役員会
- 3月 11日 …………… 掃除 荒野
- 3月 14日 昼席午後1時より …………… 春季彼岸会法座
- 3月 15日 朝席午前10時より …………… 春季彼岸会法座 おとき
- 3月 15日 昼席午後1時より …………… 春季彼岸会法座
- 3月 15日 午後3時半より …………… 婦人部新旧役員会
- 4月 2日 午後6時より …………… 本部役員会



☆ 元門信徒会会長の植木岩夫さんが亡くなりました。

元随泉寺門信徒会会長植木岩夫さんが1月11日にお浄土に還られました。行年102歳でした。お生まれが明治43年9月11日ですから、明治、大正、昭和、平成の4代に渡って生き抜かれました。

静かに思いますと、人の世に生を受けても千年の齢を重ねることはできません。まことに草の葉に宿る露のようにはかなく、風の前の灯火のように保ちがたいのは人の命であります。まして植木さんが生きられた時代は、間に戦争というまことに大変な困難な時代です。それを生来の陽気な性格で、明るく見事に生きられました。

思えば植木さんは生前仏法を尊び、聞法に励み、さまざまな苦難を乗り越えて、美しき念仏の行者としてその生涯を全うされました。わけても随泉寺総代門信徒会会長として仏法興隆と随泉寺の発展に尽くされたことは人々の称讃されるどころです。

私が住職に補任されるときに、一緒にご本山に上山して下さいました。ご門主様から辞令をいただくときには一緒に並んでいただきました。思い出深いものがあります。爾来門信徒会長として、本堂の屋根の大修復等の記念事業や住職継職の大法要など、ともに成し遂げて下さいました。難しいことがあっても、「何とかなるよ、山より大きい獅子は出んから」と明るく話して下さいました。

今度は還相の菩薩となって人々をお導きくださることを念じ、いつの日か浄土での再会を期します。ありがとうございました。

いのちのうた 作詞・作曲 Miyabi (竹内マリア) 歌 茉奈加奈

生きてゆくことの意味 問いかけるそのたびに
胸をよぎる 愛しい人々のあたたかさ
この星の片隅で めぐり会えた奇跡は
どんな宝石よりも たいせつな宝物
泣きたい日もある 絶望に嘆く日も
そんな時そばにいて 寄り添うあなたの影



二人で歌えば 懐かしくよみがえる
ふるさとの夕焼けの 優しいあの くもり
本当に大事なものは 隠れて見えない
ささやかすぎる日々の中に かけがえない喜びがある
いつかは誰でも この星にさよならを
する時が来るけれど 命は継がれてゆく

生まれてきたこと 育ててもらえたこと
出会ったこと 笑ったこと
そのすべてにありがとう
この命にありがとう

3月

「目をあけて眠っている人」私もその一人でした

中学校の校長を勤めさせていただいていたときでした。あちらこちらでがんばっている卒業生たちがお正月休みに帰ってきて、学校を会場に同級会をしました。はじめに、自分は今、どんなことを考えながら、どういうことをがんばっているかという自己紹介をしたのです。

そのときの一人の青年のことばには、みんな感動してしまいました。その青年は申しました。「ぼくは、中学在学中は、皆さんもよくご存じのとおり、勉強はできず、わからないことがあっても、質問もできないだめな生徒でした。勉強ができないから進学はできません。個人商店に就職したのですが、その店に、ぼくと同年の娘さんがいるのです。その娘さんが『この靴、磨いといて』と靴磨きをいっつけます。靴くらいは磨きますが、シャツやズロースの洗濯をさせられたときには、男に生まれて、同年の娘さんのこんなものまで洗濯しなければなら



かと思うと、無念で、無念で、涙があふれて仕方ありませんでした。そのとき、涙でかすんだ臉の向こうに見えてきたのは、但馬の山奥で、貧乏な百姓をやっている両親の姿でした。それが見えてきたとたん「これくらいのことくじけてなるか、ズロースだろうが何だろうが洗わせてくれ、くじけんぞ」という思いがこみあげてきて、ほほえみを取り戻すことができました。皆さん、ぼくの十年先を見ていてください」というのです。みんなみんな、涙なしには聞くことができませんでした。

さて、人間というものは、この青年のように、「ぼくの十年先を見ていてください」ということにならないと、光を放つことはできないのではないのでしょうか。だめな人間というものは、素質の悪い人間ということではなくて、スイッチのはいらぬ人間ということではないのでしょうか。私は、このように考えて、子どもたちに、いつも、次のように呼びかけてきました。

心のスイッチ

人間の目は ふしぎな目 見ようという心がないと 見ていると 見えない

人間の耳は 不思議な耳 聞こうという心がないと 聞いていると 聞こえない

頭だってそうだ 心が眠っていると頭の働きをしてくれない

まるで 電灯のスイッチみたいだ

仕組みはどんなに立派でも スイッチを入れなければ 光は放てない

「目をあけて眠っている人」私も、その一人でした。

「たくさんの思い出をありがとう」

妻は、優しくときに厳しく、子どもを育て上げました。

畑仕事に精を出し、いつも体を動かしていた妻。家族のためによく尽くしてくれたと、共に歩んだ五十七年を感謝の気持ちで偲んでいます。

駅に近いわが家から、電車に乗って二人であちこち出かけたものでした。旧広島市民球場でカープを応援したり、三原の神明市や尾道の菊人形展に足を運んだり・・・訪れた場所の数だけ、妻と紡いだ思い出があふれます。

お正月には、妻と娘が作るおせち料理が並び、家族全員でにぎやかに過ごすのが恒例でした。今年も美味しい料理を囲んだその数日後、妻は体調をくずしました…。

妻 幸子は、平成二十四年一月二十日、八十二年の生涯をとじました。急の れに悲しみがつのりますが、いま安らかな表情をしていることは、何よりの慰めとなっています。「最後までよく頑張ってくれました」とねぎらいの言葉をかけ、感謝を込めて見送りたいと思います。

畑中宏一

法名 釋信称 俗名 畑中 幸子 平成24年1月20日往生 行年 83才

同窓会

同窓会の案内が来ました。残念ながら日曜日で出席できませんでしたが、久しぶりに電話がかかってきました。声を聞いたら47年前に還ってとても懐かしい思いがしました。私が卒業した中学校はもう廃校になって、校舎の一部分だけしか残っていないそうです。しかし卒業のときに植えた記念樹が大きくなって残っているそうです。孫ができたやつ、ご主人が亡くなった人、会社が倒産した人、病気になって闘病中のやつ、定年退職をして田舎に帰ったやつ、娘がようやく結婚したやつ、みんなそれぞれです。人生いろいろですが、心のどこかに支えとなってくれるものがあります。それはひょっとすると故郷の大地かもしれません。あの懐かしい母や友なのかもしれません。

記念樹 作詞 天野 滋

校庭の隅に みんなで植えた記念樹 いつの日にか 遠いところで 思い出すだろう
それは多分 つらい時泣きたい時 緑色の葉っぱ風に 揺れる記念樹

忘れないずっと みんな子供だったこと スコップうまく 使えずに 顔見合わせた
大人になっても 心から笑いたいね あの日空の雲は夢の かたち描(カ)いた
夕暮れの校舎 みんなで植えた記念樹

ニワトリが 朝と間違え 鳴いていたっけ 振り返るのは つらい時泣きたい時
枝は空をめざし風に 揺れる記念樹 揺れる記念樹